

中世宇都宮氏

頼朝・尊氏・秀吉を支えた名族

Article of Utsunomiya's history × 01

頼朝・尊氏・秀吉を支えた 名門武士団・宇都宮氏

宇都宮氏は、平安時代の末期から戦国時代の終わりまで、四百年以上にわたって宇都宮を本拠に活躍した名門武士団です。宇都宮氏と中世の宇都宮に注目することによって、あらためて宇都宮の歴史的な重要性があらかになりま



三代宇都宮朝綱像(宮内庁書陵部蔵「摹古絵巻」)



九代宇都宮公綱像
(栃木県立歴史民俗博物館蔵「太平記絵巻」)

その一 頼朝が戦勝を祈る

宇都宮氏は、下野一宮である宇都宮明神(現宇都宮「荒山神社」)の神職をつとめ、その関係で神社の名称をみずからの名字として名乗りました。宇都宮明神は、古くより朝廷に仇なす敵を討ち従える神として有名でした。

その二 尊氏が最大の危機を脱する

鎌倉幕府の滅亡後、足利尊氏があらたに室町幕府を開きます。室町幕府は、尊氏と弟の直義によって政権が運営されましたが、やがて両者は対立することとなり、幕府はふたつに分裂します(観応の擾乱)。京都から鎌倉に下った直義を追撃した尊氏は、東海道の難所である駿河国薩埵峠(静岡県静岡市)で直義方の大軍に包囲され、窮地に陥ります。このとき、宇都宮氏の十代当主氏綱は、無二の尊氏方として宇都宮から救援に駆けつけ、尊氏を危機から救いました。

文治五(一一八九)年に源頼朝は、最後の敵対勢力となった奥州藤原氏を討つため、大軍を率いて鎌倉を出陣します。奥州平泉に向かう途中、同年七月二十五日に宇都宮に到着した頼朝は、まず宇都宮明神に参詣して、きたる決戦での勝利を祈願しました。その後、ぶじに奥州藤原氏を破った頼朝は鎌倉への帰路でも、お礼参りのためにふたたび宇都宮明神に詣でています。頼朝にとって最大の功労者は、宇都宮氏が神職をつとめる宇都宮明神だったといえるかもしれません。

この結果、幕府の分裂は取東へと向かい、幕政はようやく安定を取り戻します。氏綱は尊氏を窮地から救った功績を評価され、守護として越後(新潟県)・上野(群馬県)両国の統治を任せられました。名将楠木正成は、かつて氏綱の父公綱を「坂東

一の弓矢取り」と評して、直接の対戦を避けたと伝えられます(『太平記』)。氏綱の戦上手は、まさしく父親ゆずりといえそうです。

その三 秀吉が天下を統一する

室町幕府の衰退とともに、日本は戦国時代を迎えます。その戦国の世を終わらせた豊臣秀吉は、天正十八(一五九〇)年に小田原で北条氏を滅ぼしたのち、宇都宮に下向します。秀吉の宇都宮到着は同年七月二十六日で、その後八月四日に奥州会津に向けて出発するまで、九日間にわたって宇都宮城に滞在しました。

名に領地を再配分するいつぼうで、宇都宮への参上を怠った那須資晴らの領地を没収するなど、天下統一の総仕上げをおこなっています。つまり、秀吉の天下統一は、宇都宮で完成したといっても過言ではありません。

秀吉は、なぜそれほどまで宇都宮にこだわったのでしょうか? その答えは、秀吉が宇都宮に到着した日付にあるような気がします。奇しくも、秀吉の約四百年前にも東北制圧をめざして宇都宮明神に参詣し、その結果、実質的な天下統一を実現した人物がいました。源頼朝です。秀吉は、以前より頼朝の存在を強く意識しており、宇都宮への下向も早くから表明していました。宇都宮に七月二十五日に到着した頼朝、翌二十六日に到着した秀吉、これは単なる偶然ではなく、秀吉にとっては必然的な日程だったとみられます。

その四 宇都宮氏ゆかりの名宝約二四〇件が一堂に

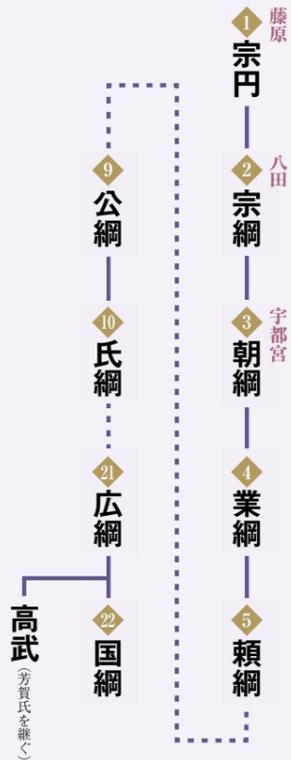
宇都宮の歴史的な重要性は、以上にとどまりません。たとえば、宇都宮氏とゆかりが深い「百人一首」。五代当主頼綱と歌人藤原定家との交流がきっかけとなつて、古来からの代表的な秀歌集「百人一首」が成立したとされています。宇都宮氏一族を中心とした和歌の一大ネットワーク「宇都宮歌壇」は、同時期の京都・鎌倉の歌壇と比べてもまったく遜色はなく、宇都宮氏の「和歌好き」は後世までよく知られていました。

また、頼綱は浄土宗の開祖法然の弟子となつて京都を中心とした活発な活動をみせたほか、同じく法然の弟子で浄土真宗の開祖となつた親鸞も宇都宮氏領内の稲田(茨城県笠間市)を拠点に周辺への布教にあたりました。その縁で現在の真岡市高田に専修寺が建立されて、宇都宮氏からも手厚い保護を受けています。

この秋に開館三十五周年を迎える栃木県立博物館では、以上のような宇都宮氏の歴史的な重要性を再評価するために、九月十六日(土)〜十月二十九日(日)を会期として、開館三十五周年記念特別企画展「中世宇都宮氏―頼朝・尊氏・秀吉を支えた名族―」を開催し

宇都宮氏略系図

(番号は当主の代数)



五代宇都宮朝綱像(知恩院蔵「法然上人絵伝」)

ます。会場には、全国に残された宇都宮氏ゆかりの国宝・重要文化財約七〇点、合計約二四〇件の名宝が一堂に展示されます。中世宇都宮氏をメインテーマとするはじめての企画展であり、規模の面でもこれまでで最大規模の展示となります。ぜひこの機会に、宇都宮の豊かな歴史・文化にふれてみてください。詳しくは、県立博物館教育広報課(☎0286341312)までお気軽にお問い合わせください。

(栃木県立博物館学芸部長 江田郁夫)

宇都宮氏一族の

信仰と造像

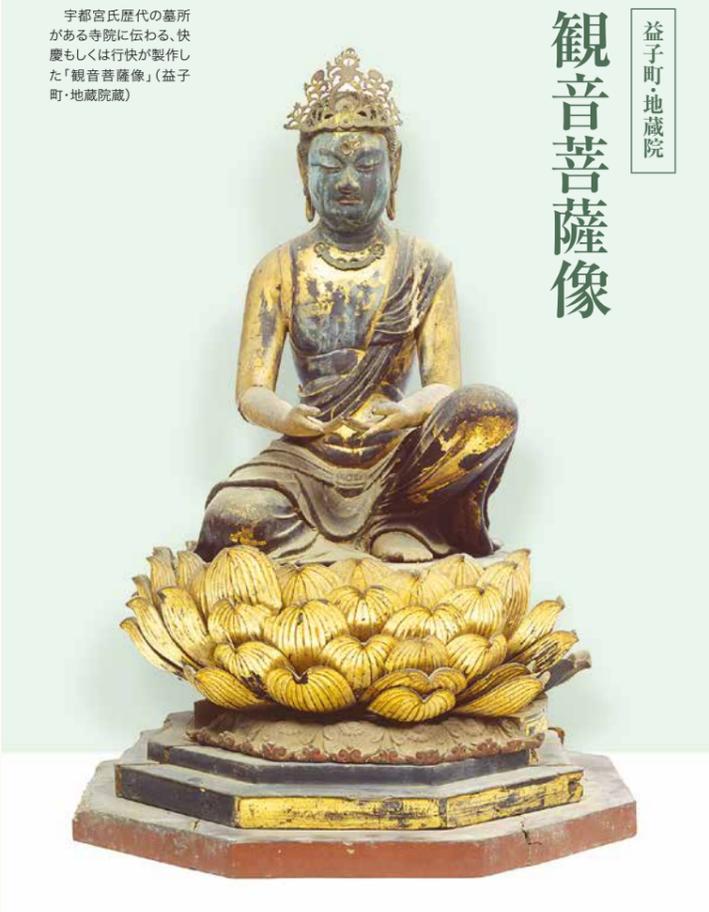
武勇に優れた宇都宮氏一族。しかし他方では造像活動にも熱心でした。一族が造立に携わったことが明らかで、中世宇都宮氏一族の信仰と造像の様相を探ってみましょう。

鎌倉時代、武士たちの造像

平安時代末期、源氏と平氏の争いが激しさを増し、治承四（一一八〇）年十二月二十八日、歴史的な大事件が起こりま

した。平重衡ら平氏軍により、東大寺や興福寺といった南都（現在の奈良）の大寺院が壊滅的な被害を受けたのです。いわゆる「南都焼討」です。この史実からは、武士は、神仏を軽ん

益子町・地藏院



宇都宮氏歴代の墓所がある寺院に伝わる、快慶もしくは行快が製作した「観音菩薩像」（益子町・地藏院蔵）

観音菩薩像

とは案外知られていないのではないのでしょうか。実は、大仏殿諸仏の願主に割り当てられた有力御家人のなかの一人が、三代朝綱だったのです。

朝綱は脇侍の観音菩薩像の願主となり、造像は快慶と定覚が担当しました。快慶も定覚も運慶と同じく鎌倉時代の造仏界を牽引した「慶派」とよばれる仏師集団に属していました。慶派仏師は東国武士たちの造像に多く関わっており、宇都宮氏ともこの頃から繋がりが生まれたと想像されます。

十三世紀前半

いま、快慶あるいはその弟子の行快が造ったと考えられている観音菩薩像と勢至菩薩像が益子町に伝わっています。大羽にある地藏院本尊阿弥陀如来立像の両脇侍像で、地藏院は朝綱が開いた尾羽寺を前身とし、宇都宮氏歴代の墓所でもあります。また、朝綱の息子（または女婿）で、氏家氏の祖とされる氏家公頼は、塩谷町にある佐貫石仏奥の院大悲窟を建保五（一二二七）年に修造し、平安時代後期作とみられる銅板曼荼羅を奉納しました。その銅板曼荼羅は現在宇都宮市の東海寺に伝わっています。作風から、鎌倉や京都といった中央ではなく当地で造られたものと考えられます。

十三世紀半ば

五代頼朝は浄土宗の開祖法然の弟子と

じ戦いに明け暮れた人たち。というイメージを強く抱くかもしれませんが。しかし、南都の寺社を焼き払ったのは武士でしたが、再興を支援したのもまた武士だったのです。鎌倉幕府をひらいた源頼朝は東大寺大仏殿の復興を後押しし、幕府の有力御家人が大仏殿諸仏の願主に割り当てられました。そして建久六（一二九五）年、大仏殿は完成し落慶供養が行われました。

武士たちはこのような大事業に携わっただけでなく、個々の信仰に基づいて寺院を建立し、仏像を造立して安置していました。例えば、頼朝は文治元（一一八五）年に父義朝追善のため、そして建久三年には弟義経と奥州藤原氏の追善のため、それぞれ鎌倉に勝長寿院と永福寺（ともに現在廃寺）を建立しました。また、横須賀市にある浄楽寺の阿弥陀三尊像と不動明王および毘沙門天像は、鎌倉幕府の侍所別当を務めた和田義盛が文治五年に発願し、仏師運慶が製作したことが知られています。下野国においても、源姓足利氏二代義兼が樺崎寺（現在廃寺）を建立し、かつては運慶作の二軀の大日如来坐像が安置されていました。現在、足利市光得寺と東京の真如苑が所蔵する御像がその二軀にあたります。

十四世紀以降

宇都宮氏の造像は、現存遺品からみると十二世紀末〜十三世紀にかけてが最盛期でした。

十四世紀以降の作例として、宇都宮市の清巖寺には八代貞綱が亡き母の十三回忌のために製作した鉄塔婆（正和元（一二三二）年作）が伝わっています。もとは貞綱が創建した東勝寺にあったものを、廃寺になった際に宇都宮氏ゆかりの清巖寺に移したことがわかっています。現存する最古の鉄製塔婆として知られ、阿弥陀三尊の躍動感ある来迎の様を表現しています。

同じく宇都宮市一向寺に安置される銅造阿弥陀如来坐像（応永十二（一四〇五）

宇都宮市・東海寺

銅板曼荼羅

氏家公頼が佐貫石仏奥の院大悲窟に奉納した「銅板曼荼羅」（宇都宮市・東海寺蔵）



このように、武士たちは造寺造仏活動にも熱心に取り組んでいました。決して、神仏を軽んじていたわけではないのです。

宇都宮氏の造像

「坂東一の弓矢取り」とも評され武勇に秀でた宇都宮氏でしたが、一方では同時代の武士たちがそうであったように多くの仏像を造立しました。先述した南都焼討からの東大寺再興事業にも関わっていたこ

年代を追いながら、宇都宮氏一族の造像についてみてみました。これらは一族の信仰と作善を物語る貴重な遺品といえます。四百年以上にわたり変わりゆく時代を生き抜いた宇都宮氏一族。多くの仏像を遺したその背景には、初代宗円が宇都宮明神の神職を務めたことからはじまる神仏への帰依が代々受け継がれていったのかもしれない。

（栃木県立博物館学芸員 深沢麻亜沙）

薬師如来立像

茨城県笠間市岩谷寺



笠間時朝の銘がある「薬師如来立像」（茨城県笠間市・岩谷寺蔵）

中世宇都宮氏ゆかりの場所を訪ねる 市内「ゆかりの地」探訪マップ

宇都宮氏は中世を通じ宇都宮城の城主として、また宇都宮三荒山神社の社務職として、当地を治めていました。また、中世の宇都宮には多くの寺院が建ち並んでいましたが、宇都宮氏が豊臣秀吉によって改易されると、菩提寺であった東勝寺が廃寺となるなどし、多数のゆかりの場所が失われてしまいました。ここでは、市内に残る宇都宮氏ゆかりのスポットの一部を地図と写真で紹介いたします。



興禅寺

宇都宮家第8代宇都宮貞綱が正和3（1314）年に開基。本尊は木造釈迦如来坐像（市指定文化財）で、「文和二年」と刻まれており、南北朝時代の作。境内には、宇都宮貞綱・公綱の墓と伝えられる五輪塔がある。江戸時代には「浄瑠璃坂の仇討ち」の発端となった事件が起こったことでも有名。



慈光寺

宇都宮家第17代の宇都宮成綱が永正13（1516）年に開基。慈光寺は成綱の法号による。宇都宮城築城のとき、鬼門固めのため百目鬼山といわれ、寺名も山ノ寺と呼ばれていたという。境内には宇都宮藩の御用鑄物師戸室貞国が宝永元（1704）年に鑄造した銅鐘や樹齢約200年の桜（ともに市指定文化財）のほか、平成20年に再建された赤門がある。



宇都宮
二荒山神社

豊城入彦命を主祭神とする神社。前九年の役（11世紀）の際に源頼義・義家親子に随行して戦勝を祈願した藤原宗円（宇都宮家初代）が当社の社務職となり、以後宇都宮氏が代々社務職を勤めた。7代成綱が制定した「宇都宮弘安式条」では、全70条のうち約3分の1が当社および関係寺院に関するもので、宇都宮氏の権威の背景として重要視されていた。宝物として鉄製狛犬や三十八間星兜（ともに国重要美術品）、紙本墨書新式和歌集（市指定文化財）などがある。



生福寺

宇都宮家第14代の宇都宮等綱が永享10（1438）年に開基。宇都宮等綱の直筆の額などがあつたが、文化11（1814）年の火災や戊辰戦争・宇都宮空襲の戦災によって焼失している。境内には、江戸時代の宇都宮の著名な鑄物師である戸室将監藤原元蕃の青銅製宝篋印塔（市指定文化財）や幕末の宇都宮藩に影響を与えた豪商の菊池淡雅・菊池（菊池）教中親子の墓がある。



一向寺

宇都宮家第7代成綱が建治2（1276）年に開基。境内のお堂には阿彌陀如来坐像（国指定重要文化財）がある。全身に1,100字以上の発願願書や結縁者名が刻まれ、凶事が起こると汗をかくとの伝承があることから通称「汗かき阿彌陀」と呼ばれている。また、当寺に伝わる「一向寺文書」（非公開）（県指定文化財）には宇都宮氏からの寄進状などがある。



ちょっと足を伸ばして

多気城跡

多気城跡は宇都宮市の中心部から北西約8 km に築かれた北関東最大級の山城跡である。この城は康平6（1063）年に宇都宮家の初代藤原宗円が築城したという伝承があるが定かではない。戦国時代末期に小田原の北条氏の攻勢が強まる中、第22代の宇都宮国綱は宇都宮氏の本城を宇都宮城から多気城に移したと考えられており、北条氏の滅亡後は宇都宮城に本城を戻した。現在も当時の遺構がよく残っている。



飛山城跡

飛山城跡は宇都宮市の中心部から東に約7 km に位置し、鎌倉時代の後期に宇都宮氏の重臣芳賀高俊によって築かれたと伝えられている平山城である。以来300年間、豊臣秀吉の命令により破却されるまで、宇都宮氏を支えた重臣芳賀氏の拠点として機能してきた。昭和52年に国指定史跡となり、現在は「飛山城史跡公園」として中世の建物や堀・土塁の一部を復元しているほか、「とびやま歴史体験館」では出土品や城の歴史を紹介している。



宇都宮城址公園

宇都宮城のはじめは館であり、伝承によると宇都宮家の初代藤原宗円が居館を築いた（藤原秀郷が築いたとも）といわれている。発掘調査では、鎌倉前期の「かわらけ」が出土し、この時期には確実に城（館）があったことがわかっている。現在復元されている城址公園は江戸時代のもをモデルにしているが、土塁内や公園内の「清明館」では、発掘調査で出土した成果などを展示している。



清巖寺

宇都宮家第5代宇都宮頼綱（蓮生）が建保3（1215）年に開基し、後に現在の場所に移った。頼綱や芳賀高照・高繼の供養塔がある。また、日本最古の鉄塔婆（国重要文化財）が境内の収蔵庫にあり、拝観することができる。これは8代貞綱が亡き母の供養のため正和元（1312）年に建てたもので、もとは東勝寺にあったが、廃寺になったため清巖寺に移された。

MAP
of tsunomiya's history